

中央検査部だより

2017年1月13日発行 第59号

年頭のご挨拶

中央検査部部長 高橋 徹



あけましておめでとうございます。

新年のスタートにあたり、年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年は、「臨床に開かれ、現場とつながる検査部」をめざしていることを書きました。患者接遇の改善、医師の問い合わせへの対応、CPCの運営など、これまでやってきたことだけではなく、輸血監査やICTラウンドなどで検査技師がチーム医療の一員として病棟に伺うことや臨床現場のニーズの吸い上げにも力を入れ、現場にできるだけ関わる努力をまいりました。みなさまの実感となっていれば幸いです。

さて、本年はハード面での機器拡充として、微生物検査部門にタンパク質量分析装置(MALDI-TOF MS)の導入が計画されています。これにより、細菌培養検査の検出菌同定が1~1.5日短縮されます。医師の方々の感染症治療の方針策定に貢献できることを願っております。

診療機能の核となるべき検査部門の充実を願って、検査部スタッフには一層の自己研鑽を求めつつ、最新機器の整備を進めてまいります。

本年もどうぞよろしく御願い致します。

本物とは

病理部長 田中 慎介

明けましておめでとうございます。皆様に取りまして、素晴らしい一年でありますことを祈念致します。

今回は「本物」とは何かについて私見を書いてみたいと思います。「なんでも鑑定団」と病理診断は違いますが、品物の真贋を見抜くことと、組織の良悪性を判定することには似た面があり、基本的に主観的な判断でもありますので、私はよく比較に出します。主観的と言っても、多くの細かな客観的事実を基に、経験に基づいてそれらを統合し判断しているのでしょう。病理に限らず、多くのプロフェッショナルな仕事がそうだと思います。

骨董の世界では、真贋を見抜く目を持つ、いわゆる目利きになるためには、本物に慣れ親しむことが一番の道だと言われています。では、本物とは何でしょうか？果たしてそんなものは存在するのでしょうか？あるいは人によってその基準は違うものなのでしょうか？

私の考えでは本物とは「嘘のないもの」で、人の見方や時代によっても変わらない、普遍的な価値の塊だと考えます。分かりやすく製品で言えば、隅々にまでこだわりがあり、目に見えない部分にも妥協やごまかしのないものは本物と言えるでしょう。瞬時に見抜くことは難しいですが、比較的簡単な方法として「飽きのこないものが本物」と信じ、私は実践しています。一時的なことではなく、長い目で見たときにどうか。噛めば噛むほど味がでてくるのか、飽きてくるのか。そういう視点を大切にしています。ちなみに、浜田省吾さんの歌は昔からのファンで、いまだに飽きることはありません。

人に対して好き嫌いがありますが、製品や骨董、芸術作品などと違って、人格そのものは遙かに複雑なもので、人の善し悪しを自分の尺度で推し量ろうとすると失敗することが多いですので、その点は注意しています。

多くの「本物」に出会える一年でありたいと願っております。病理診断についても奥深く、「本物」の病理医に近づくことができるように日々精進させていただきます。



国際学会に参加して

生化学検査室 佐々木 宏典

2016年8月31日から9月4日にかけて、神戸で開催された第32回世界医学検査学会(The 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science, IFBL2016 KOBE)に参加しました。28年ぶりに日本で開催されるということで、私も“Evaluation of Delta Check Method by using Reference Change Value based on Uncertainty”という題目でポスター発表を行いました。国際学会に1人で参加するのは初めてだったので、緊張と不安の募る中、発表時間を迎えました。幸い海外から参加された方々が発表を聴きにきてくださり、拙い英語でどうにか議論を交わすことができました。伝えたいことがすぐに言葉にできず、自分の語学力の無さを痛感しましたが、それもまた楽しく感じられるほど、非常に刺激的で有意義な時間を過ごすことができました。

近年、臨床検査領域では検査データの標準化、精度保証の国際化が進んでおりますが、臨床検査業務を担当する臨床検査技師も国際化の流れに対応していかなければならないと感じています。国際的な新しい知見を日常の臨床検査業務に取り入れるためにも、また英語力を磨いて国際学会に参加したいと思います。

病理組織の固定液を変更しました！

病理検査室 出尾 優佳

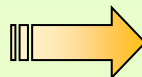
昨今は分子標的治療薬による、個別化治療が進歩しています。それに伴い、患者治療薬選択のためのコンパニオン診断薬の開発もすすんできました。病理検査に関係する主なコンパニオン診断のバイオマーカーは乳癌のHER2、胃癌のHER2、大腸癌のEGFR、肺癌のALK、悪性黒色腫のBRAFなどがあります。病理検査室では標本作製する際に、これらのDNAを保持するために固定液を20%非緩衝ホルマリンから15%中性緩衝ホルマリンに変更しました。

- ・中性ホルマリンによる固定は、遺伝子への障害が少ない！
- ・固定力は以前より弱いため、早く固定させる工夫を行う必要がある！

早く固定させるための工夫として



板にそのまま貼り付けた場合



12時間後。貼り付けた面がまだ赤く、固定不十分



ガーゼを敷いて貼り付けた場合



12時間後。貼り付けた面も十分に固定されている

自己融解を防ぐために、「材料に割を入れて固定する」、「固定液をしっかりと入れる」、「板に貼り付ける場合は、板と材料の間にガーゼを入れる」等、協力をよろしく願います！！！！

